公開対談シリーズ 第1回

NINAGAWA 千の目（まなざし）

（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督の蜷川幸雄が各界気鋭アーティストたちを迎えてお話を聞く公開対談シリーズ「NINAGAWA 千の目」がスタート。その第一回目には、来る5月に彩の国さいたま芸術劇場で公演が予定されているコンドルズの代表近藤良平さんにご登場していただきました。世界も世代も違う2人の創作の現場について興味深いお話が展開されました。

photo:幸田 森

僕の中には、いつも千人のお客さんの目が…

蜷川（以下N）　芸術劇場の創造的責任者になった蜷川です。

どうぞよろしくお願いします。

私は多くの人にこの劇場を愛して頂きたいと思っています。

（後ろに）「千の目（まなざし）」と書いてあります。

これについて申しますと1971年か72年の僕が若い頃、映画館の休憩時間に廊下に出たら、見知らぬ若者が寄ってきました。「蜷川さん、ちょっと話があるんです。外に出てくれませんか」と言うので喫茶店に行きました。突然、テーブルの下で「ガチャッ!」と音がしました。何かと思ったら、ジャックナイフが僕に当てられていて「蜷川さん、あなたは希望を語りますか?」「希望なんか語らないよ。語れるはずがないよ」と答えたら「あぁ良かった。あなたが希望を語ったら刺すつもりでした」と言われました。

僕はその時思ったのです。客席にはそうやって目に見えないナイフを持ったお客さんがいっぱいいて、僕がどういう事をし、何を語り、どのように生きていくのかということをちゃんと見ている人達がいる。そのときから僕の中には、いつも千人のお客さんの目があり、千本のナイフを持ったお客さんがいて、「お前はちゃんと現実を正しく見て、誠実に物を語る演出家であり続けられるのか?」と問いかけているんです。今度この劇場の創造的責任者となり、何をやりたいのかを知っていただくために、新しく対談シリーズをスタートさせて頂くこととしました。

このシリーズを「千の目（まなざし）」と名付けて、これから色々な方々とお話をしながら、その楽しみを皆さんと共有していきたい、そして、ここに来ると楽しいと思える劇場にしたいと思っています。

学ランが衣装、タイツじゃなく股引

N　さて、第一回目のお相手は舞踊集団「コンドルズ」の主宰者であり振付家でもある近藤良平さんです。不思議なダンスというか、新しいパフォーマンスだと僕は思っています。僕は近藤さんのファンで、いつかお会いしたいと思っていました。それで対談シリーズの始めは、是非、近藤さんに来て頂こうと思いました。

色々な事をこれからお聞きしたいと思っています。

では、近藤さんです。（拍手）

近藤（以下K）　緊張しますわ。

N　まず、近藤さん編集のDVDを観せて頂こうと思います。

（映写開始）

K　これは去年の夏に、シアターアプルでやった公演のオープニングです。みんなが学生服を着ていますが、全然学生ではありません。よく見ると分かると思いますが、四十過ぎもいます。（笑い）働いている人が多くて、学校の先生だったり、もちろんダンスを中心にやっている人もいます。

N　ナンセンスなというか権威崩しのシーンが好きなんですね。

K　何故なんでしょうかね。僕はそういう育ちなんでしょうか。あまりナンセンスだと思ってないんですけど、そういうことのズレが滑稽さになっちゃうんですかね。

N　例えばタイツで踊っても股引に見えるではないですか。

K　本当に股引です。クラシックバレエとかモダンバレエは普通タイツをはいているじゃないですか。これってどう考えても滑稽に見えてしまうんですよね。

N　基本的にメンバーはダンサーの経験のある人なんですか?

K　それがちょっと変わっていて、僕達そんなに若くないので、ダンスをバリバリにやっていた人は誰もいないんですよ。僕も含め大学の時に間違ってモダンダンスを始めてしまったみたいな、そういう人の集まりなんです。

N　集団的にダンスのレッスンをする事はないんですか?

K　まずないですね。

N　では、すぐ振りに入っていくんですか?

K　そうですね。もちろんストレッチとかはします。振り付けがちょっと特殊なんですけど、彼らは僕と付き合いが長いので僕の振りは踊れるけど、他の踊りは全くだめですね。

N　僕の芝居ばかり出ていると歪むのと同じです。僕の場合は性格も歪んでしまいます。

N　学ランを衣装にしたということはどういう事なのですか?

K　始めたころに、何を着るのかを考えるのが難しくて、たまたま全員持ってきたのが学生服だったんです。

（映写終了）

N　僕も舞台だけじゃなく映像もやっているので見てください。「青の炎」で、ジャニーズの二宮和也と松浦亜弥を使って一緒に仕事をしました。

（映写開始）

Profile

近藤良平（こんどうりょうへい）
ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。主宰する「コンドルズ」は男性のみのダンスカンパニー。舞台衣装は「学ラン」。ハイスピードなシーン展開で、ダンス、映像、生演奏、人形劇、演劇を緻密な計算のもと縦横無尽に使いこなすステージングで話題の嵐に。『情熱大陸』、『トップランナー』にも出演。さらに『気志團TOUR '04』、NHK教育『からだであそぼ』の振付なども担当。2004年第4回朝日舞台芸術賞寺山修司賞受賞。

蜷川幸雄（にながわゆきお）
埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年も「近代能楽集」ニューヨーク公演、歌舞伎「NINAGAWA十二夜」、「王女メディア」、「天保十二年のシェイクスピア」など多数の演出を手掛ける。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

N　これは殺人を犯した少年が、自分の家に女の子を連れてくる場面です。僕は、手前に人がいて、ちょっと引っかけて奥が写っているのが好きなんです。立体的に奥行きがあるよりは。これは自分で、こういう事ができるかなとちょっとやってみて、それで二宮にやってもらったのですが。実はこの手です。原作では、この後二人は寝るんですが、寝る代わりに水槽越しに手と手を合わせるというのがミソです。アイドルをバカにしてはいけないですよ、この二人はうまいですよ。「男の子にとって世界一優しい顔で見つめろ」と松浦に言うと、ああいう顔をするわけですね。

「二宮泣けっ!」（笑い）

（映写終了）

枠組みの中で自由にやってもらうこともある

N　僕はいつもうるさいことを言っているから、逆に俳優に自由にやってもらう楽しさがあります。才能がある人でないとだめですけれどね。振り付けでは、「このシーンは自由に踊っていいよ!」というようなことはあるのですか?

K　もちろんありますよ。ただ即興というのは実は僕はあまり好きではないんです。何故かというと、体にダンスの言葉があるとしたら、それをいっぱい持っている人はいいけど、僕も含めてそんなに多くはないじゃないですか。特にコンドルズのメンバーなどは、みんな僕の振りしか出来ないから、自由に踊らせすぎてもそんなに良くないです。僕は決めごとをどんどん出すので、そこからどういうふうに変えてくれるかに魅力を感じますね。

N　それは基本的に僕も同じかもしれません。あまり即興的な演技は好きじゃないんです。枠組みがあり、きちっと決めてあるのですが、天才的な人たちには、「自由にやってください」と言います。そういう人はいいですけれど、そうでないと。

K　見ていてくたびれちゃいますよね。

N　舞台に出ていって止めたくなったりします。この頃は、出ていっちゃってるんですよね。この4月にもやる「タイタス・アンドロニカス」という芝居では、切られて手がない主人公なんですが、吉田鋼太郎という俳優が途中で手を出しちゃったんです。手を使っているんです。

舞台の一番後ろで見ていたら、前のお客さんが「あれ、手があるわ」と、それで僕は「これはダメだ」と思って客席に上がり、そばにいって「おいっ、手が出ているぞ!」と言ったんですが、本人は全然わからないわけです。そんなことがありました。

「天保十二年のシェイクスピア」でも、篠原涼子のカツラが飛んで客席に落ちてしまって、早変わりできなくなっちゃったんです。僕が拾って舞台に上がりましたが、お客さんは喜んでいました。「天保十二年のシェイクスピア」だったからよかったです。

そんなことを恥じていたら、外国で仕事など出来ない

N　ところで、アメリカ公演は評判が良かったんですね。

K　そうですね。最初は向こうの人も日本舞踊の流れとか、舞踏の流れとかを想像していたのかもしれないけれど、僕たちは全く違っていたので、そのギャップを褒め讃えてくれたという気がします。

N　全く舞踏的要素はないですね。外国では舞踏は人気がありますよね。ロンドンなど歩いていると、山海塾の天児（あまがつ）さんにばったり出会ったりします。舞踏の人は、世界中を飛び回っていますね。それとは違う文脈で評価されるっていうのは大変なことですよね。

K　それは僕もびっくりしました。

N　僕はヨーロッパ的な文脈の芝居をすると大体たたかれていますね。

K　それはヨーロッパの自負があるから、絶対に褒めないのではないですか。

N　「何だと思っているんだ。東アジアをバカにしているのか」と時には言いたくなるんですが、それは半分しょうがないかなと思ったりするわけです。そういう中でコンドルズのようなやり方は結構大変だろうなと、僕は思うわけです。

K　ここまでやったら内心「やるぜ!」と思っています。変な話、ちょっとインチキっぽい感じですよね。それをある部分でちょっと評価してくれると、こんなインチキな方法が許されるんだ、それだったら堂々とインチキをやり通そうという気持ちになります。

N　と、おっしゃいますが、あるシーンはやっぱりテクニックがきちっと揃って、それは並のものではないですね。僕はその清潔感が好きなんですけれど、「やるときはやるぜ!」というのを隠してインチキというレッテルを自分で貼りながらやる仕事の痛快さはありますよね。

K　なんか見抜かれているようで、やりづらいですね。

N　フランスでやった時に「FIGARO」という雑誌が僕のことを“Kitsch”と書いたんですね。「まがいものか。いいよわかったよ。どうせ“Kitsch”だよ」と思いました。そんなことを恥じていたら、外国で仕事など出来ないと思います。ぜひ“Kitsch”の仮面を被って暴れまくってくれるといいなぁと思います。

稽古場という町工場

N　このごろ演劇をしているのは労働をしているんだという気がします。普通の人が生活しているのと似て、稽古場という町工場に行って毎日ちゃんと夕方まで目に見えない労働をして帰って来るという。芸能というのは今まではうんと外れていていいんだと思っていたし、もちろん、そうすることによって見えることもあるけれど、一方でいえば、外れながらも日々いろんな仕事をし続ける。それが日常になるような事が僕たちの仕事だなぁと思うんです。

K　僕も労働だと思っています。二十歳の頃とまったく同じ事をやっているにもかかわらず、今はちょっとお金になる。「あぁ、これは労働になったんだな」と最近は思うようになりました。

N　近藤さんのドキュメンタリーを見ていたら、「じゃ、行ってくるよ。」と家族と別れて家を出ていくのが、町工場に行くお父さんという感じがしました。僕は埼玉の川口市の出身でキューポラの町で育ったので、ビデオを拝見したら、お父さんがお弁当を持ってちょっと工場に行くという感じで、すごく良いなぁと思いました。

K　どういう時に演出のアイデアとか盛り上がっちゃいます?

N　車に乗ったりとか、一人でいる時ですかね。人と喋っていても時々、話を聞いてないとよく言われます。（笑い）

K　僕は電車が苦手なんです。色々な人がいて、観察するのが好きで見ちゃうんです。いろんな仕草や感じがあって、面白すぎて逃れられなくなります。一通り全員観察して、次の駅まで行ってしまう・・・。仕事に行く前にどっと疲れちゃうんです。（笑い）

舞台は一回で終わってしまうのが魅力

N　振り付けを見ていたら「そのアイデアではイヤだ!」と言ったりする人がいておかしかったんですけど?

K　よくあります。たぶん同じ方向を向いているんですけれど、きっと僕の調子が悪い時なんでしょうね。「ああ、そうかそうか、ここをやめよう」と変えちゃうことはあります。

N　僕はもうちょっと頑固かも知れない。でも最近は人間ができてきたから、人の意見も聞くようになったと思います。（笑い）

N　では最後に、近藤さんに質問したい方は手を挙げて下さい。

客A　モノを創る過程で何を一番大事にしますか?

K　舞台は花火みたいで、一回で終わってしまうのが魅力です。だから、結構いちかばちかで出し切ろうとします。それが一番大事な気がします。

N　では、もうおひとり。これが最後です。

客B　作品の中のパフォーマンスをつなげる上で、気遣っている点は何かありますか?

K　僕は脚本というのが一切なくて、断片的にいっぱい書く。ストーリーじゃないんです。でも結果的には、メッセージをその度に残したいと思っています。作品はどういう形でもいいのですが、流れは最終的にはとても大事にします。断片の時にはどう考えてもつながらないだろうというものを、後からつなげる作業はすごくおもしろいです。激しい動きからいきなり、ちまちました動きに転換して綺麗に踊るというのは、体力的にもかなり無理がある大変なことなのですが、その「流れ」と「無理」の両方に気を遣います。

N　お二人のご質問で観客の皆さんの関心の強さがわかりました。私もコンドルズの5月の公演「勝利への脱出」を楽しみにしております。本日はありがとうございました。

2006.2.8　彩の国さいたま芸術劇場 小ホールにて